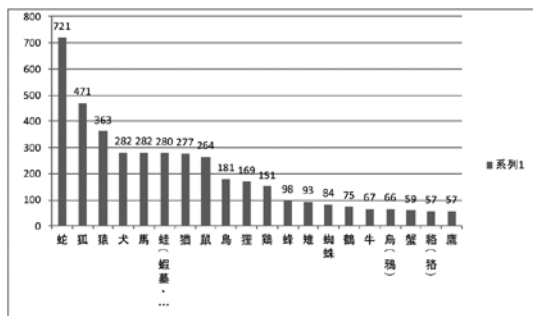


グラフ化してみた。

『日本昔話大成 本格昔話』に分類された約300話とその類話の物語の中で、狩猟の獲物や食料として登場したものを除外して昔話に登場する動物を集計、グラフ化したのが〈グラフ1、2〉である。全てを取り上げると項目数が多いため上位20位までを下記のグラフ(グラフ3)にまとめた。

グラフ3 動物採取数上位20位



『日本昔話大成第2巻 本格昔話一』から『日本昔話大成第7巻 本格昔話六』に登場した動物のうち、最も採取が多いのは蛇の721件であり、その次を471件の狐、363件の犬という流れとなっている。

現代の生物分類に当てはめた場合、蛇は爬虫類、狐・犬などは哺乳類で、5番目に採取数の多い蛙は両生類である。8番目の鳥や10番目の鶏は当然ながら鳥類に分類される。そして、大雑把な括りでまとめた「虫」という意味で呼称されることの多い節足動物と分類された生き物の中で昔話に多く登場するのが11番目の「蜂」の98件である。

(3) 「虫」の意味

前節のグラフを、哺乳類・爬虫類と両生類・鳥類・魚介類をはじめとした水性生物・虫とその他の地上に生息している小動物で分類するとこのような割合となる。

哺乳類の採取数が最も多いことは一目瞭然とすることだろう。人間は熱のあるものに親しみを持つというが、恒温生物である哺乳類に少なからず親近感を覚えていたとも考えられる上、馬や牛といった家畜は農耕や荷運びなどに重宝されていたこともあり、それだけ身近な存在だったと考えら

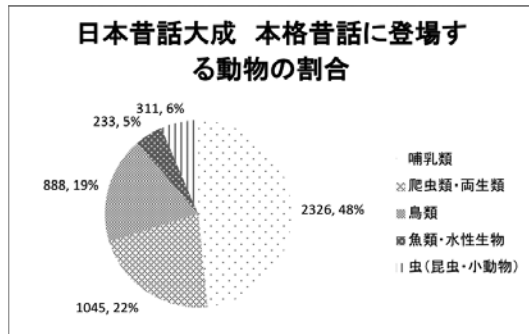
れる。採取数が多い順に見ていけば、上位のほとんどが狐や猿といった人が住む近くの山間に暮らすものや、犬・馬といった民家の傍で人と暮らしているものが多い。また、家畜となる動物にはあまり見られないが、野山に暮らす野生動物は時として昔話の物語の中では流暢な人間の言葉を操って会話しているだけではなく、時として人などの別の存在に化けて我々の前に現れるものとして、ある種の妖怪のような一面が描かれることもよくある話だ。特に狐に至っては『日本昔話大成』では「人と狐」⁽¹⁾とわざわざ章立てられて、全国に伝わる狐が人を化かす昔話が掲載されている。

これら動物の変身譚について、日本の生物学・生物史学者であった中村禎里は神の物語に由来するとした⁽²⁾。古代の日本人は動物を神の使いではなく、動物そのものが神だとしていたが、中古末から中世にかけて仏教が伝来すると六道輪廻説において畜生道は我々生きている世界とする人間界より劣ったものの位置に置かれている。そして本地垂迹説において仏は神と同じであるという考えが主流になるが、そのようになった場合、神と動物が同じものなのなら仏と動物も同じであるという等式になるわけだが、そのようなことは避けなければならない。こうした仏教の介入によって動

表1 日本昔話大成 本格昔話に登場する動物の割合

哺乳類	2 3 2 6
爬虫類・両生類	1 0 4 5
鳥類	8 8 8
魚類・水性生物	2 3 3
昆虫・小生物	3 1 1

グラフ4 日本昔話大成 本格昔話に登場する動物の割合



物は神や人よりもはるかに劣ったものであるとされ、仏教とは結び付かず動物と結びついた神は域外の神となり妖怪へと零落したのだと中村は提唱している⁽³⁾。

では、「虫」はどのようなのだろうか。あまり意識してみることは少ないが、身近さでいえば「虫」などもそこいらの土の中や茂みを覗いた入り石をひっくり返せばその下に名前もわからない「虫」がうようよと生息しているのに、何故か「虫」は狐などのような変化はしない。

本文に入る前にここで一端、「虫」という漢字の意味について軽くまとめていきたい。

広辞苑のよると「虫」とは、「①本草学で、人類・獣類・鳥類・魚介類以外の小動物の総称。昆虫など。」「②その鳴き声を愛して聞く昆虫。鈴虫・松虫など。」「③蠕形動物の称。特に回虫。」「④回虫などによって起こると考えられていた腹痛など。虫気癩の俗称。」「⑤潜在する意識。ある考えや感情を起こすものになるもの。古くは心の中に考えや感情をひき起こす虫がいると考えていた。」「⑥癩癩」「⑦ひそかに持っている愛人。情夫。隠し男。」「⑧産気づいて起こる陣痛。」「⑨⑦ある事に熱中する人。①ちょっとした事でもすぐにそうなる人、あるいは、そうした性質の人をあざけていう語。」⁽⁴⁾と、その意味は実に多様であり、「虫」という字の意味は「まむしが付している形にかたどる」とする由来があり、「虫・貝・爬虫類などに関する字の意符となる」⁽⁵⁾とあるように、ヘビ（蛇）やカエル（蛙）、ハマグリ（蛤）やアワビ（鮑）といった本来昆虫ではないものを表す漢字にすら「虫」という字は使われている。

「虫」という存在を小さい生物全般を意味する方向で使った場合、研究対象は最も採取数が多いのは「蛇」であるが、「蛇」という生き物は三輪山伝説に通じる「蛇髻入」⁽⁶⁾などの伝説で男の姿となって娘もとを訪れるものや、「蛇女房」⁽⁷⁾などでもわかるように昔話の中で度々人の姿となって登場することが多く、これは神の使いとして信仰されている動物として扱われていることが推測される。蛙もまたどうように、物語の中で人の姿をとることがあるため、昔話における「虫」への認識と考えた場合に齟齬が生じる可能性が出て来るおそれがある。また、単純に採取件数が他

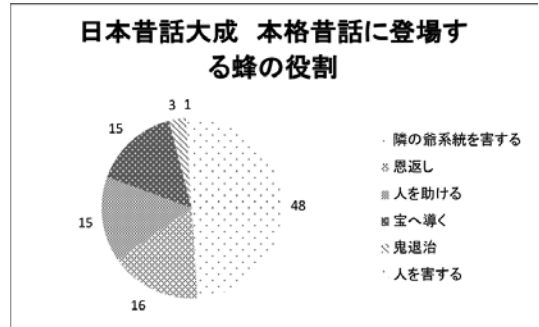
の動物よりもはるかに膨大であることから、その一つひとつを検証していくには些か時間がかかり過ぎる。しかしながら、採取件数の少ない「虫」を調べるのでは意味が無い。

以上の基準から選別し最もの当てはまったのが『日本昔話大成 本格昔話』において98件採取されている「蜂」であり、本書では昔話に登場する蜂の役割から人が「蜂」という虫をどのように認識し描いているのかをみていく。

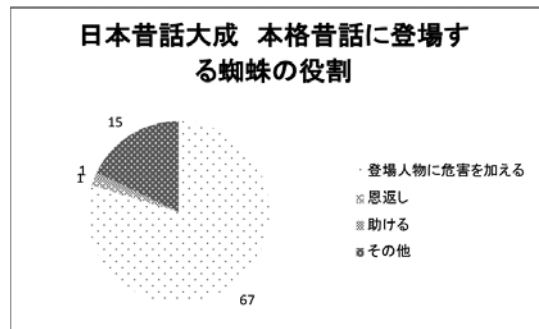
(4) 日本昔話における「蜂」の役割

『日本昔話大成 本格昔話』において「蜂」が物語の中における役割を大まかに分けると以下のグラフとなる。また、比較の対象として同じ「虫」に分類され、蜂の次に多く採取数がある蜘蛛も同様に物語における役割を大まかにグラフ化した。

グラフ5 日本昔話大成 本格昔話に登場する蜂の役割



グラフ6 日本昔話大成 本格昔話に登場する蜘蛛の役割



蜂も蜘蛛もどちらも同様に登場人物を害する役割が最も多いが、蜘蛛は84件採取された『日本昔話大成 本格昔話』に登場する役割のうち、67件とそのほとんどを占めている。それに対して、蜂の昔話での役割は多岐にわたり、最も多いのが

「花咲爺」や「舌切り雀」などが分類される隣の爺系統の昔話で隣の爺を害するのが98件のうち48件、主人公への恩返しに16件、前提として主人公に助けられる描写が存在しないにも関わらず主人公を助けるのが15件となり、宝へ導くのは15件となる。また、3件ある鬼退治は「桃太郎」系統の昔話でお供になったものであり、害を与えるという役割は産神問答で他の類話で蛇が登場する代わりに蜂が登場し、子供が死ぬ要因となるのが1件だけある。

こうしてみると、蜘蛛と比べた場合蜂は圧倒的に人に好意的な存在であると受け取ることができる。

特に蜂が恩返しとして人を助ける報恩型の民話は多く存在し、『今昔物語』では伊勢の国で水銀商が盗人に襲われるが蜂がやって来て助けくれたというもので、水銀商は仕事場で蜂を飼っており品物である酒を与えていたことからその恩返しだとされた⁽⁸⁾。もう一つは、『十訓抄』にて、大和の国で余吾大夫が妻の敵に責められた際、長谷山の奥にある笠置寺に隠れている時に蜘蛛の巣に捕まった蜂を助けると、その夜に夢に昼間に助けてもらった蜂だと名乗る男が現れ恩返しに大夫が逃げる策を語った。大夫が言われた通りに逃げると彼を追ってきた敵に蜂の大群が襲い掛かり、大夫は城に戻ることができたという⁽⁹⁾。

このように「蜂」は昔話をはじめとした説話において人を助ける存在として描かれているのだが、昔話に登場する「蜂」はどのような認識なのであろうか。

第2章 心のなかの景観と昔話

(1) 昔話と伝説の違い

ところで昔話を扱うにあたり、昔話と伝説の違いが何かという話をしておこう。簡潔にまとめるならば、昔話は架空の物語であるのに対して伝説とは真実性のある「本当の話」として後世に伝えられる物語である。

伝説と昔話、いずれも民話という広い括りのまとめであるが、伝説とは特定の時代、人物が地域と接合しており、さらに真実性を主張するために叙述の内容に一定性はなく、特定の事物を証拠として重きを置いており、ストーリーは登場する人

物よりも中心の出来事が重要視されている。昔話は、「むかしむかし……」の語りで始まるように「あったかなかったは知らぬ」ものと虚構のものだと前提されており、伝説では特定されている時代や人物が「昔」や「ある所」「ある人」と不特定かもしくは語られている地域に準じたものとなる場合が多く、ストーリーは一定の形式で叙述されることにより空想の世界へと向かい、読者の関心は、主人公たちの内心や行動といった人間の心の葛藤や勇気、愛や悪意に集められる⁽¹⁰⁾。つまり、昔話とは主人公たちの内面からの成長を描いた物語である。

(2) 心のなかの景観と昔話

日本昔話に登場する人々の「蜂」への認識を分析するにあたり、心理学的な観点で考察することはできないだろうか。

深層心理学的な研究において、昔話には私たちの心のさまざまな課題を見出すことができるという⁽¹¹⁾。スイスの分析心理学者であったユングは、昔話や伝説には共通して典型的なイメージが存在することを重視した。例えば、昔話や伝説では超常的な能力を持った子供の誕生を語る場面が多いが、それらは子供を持つ主婦たちが超能力を持った子供が生まれるかもしれないという無意識内の考えの現れではないかとする。そうした考えを元型 (archetype) とし、ある人物が何かしらこのような元型的な体験を直接的に伝えていき、そこに含まれる元型的なものが人の心の普遍性に繋がって語り継がれるようになったのが昔話だとする⁽¹²⁾。そして、昔話が心の過程を描いたものであるという場合、その元型で明らかにするとき合理的思考法で考えてはいけぬ。昔話は自然現象を体験したときに生じる心の働きを奥深くに基礎づけるものであり、元型の理解に必要な強い感情を伴う主観的体験がそこには多く存在しているのだとされる⁽¹³⁾。

ところで、昔話に時として鬼や魔女、山姥といった恐ろしい異形の存在が登場し主人公を食べうとする場合があるのだが、その多くが「くさい」や「におう」といったような匂いによる感覚表現をしている。特に魔女に至ってはグリム童話に登場するものを含め目が悪い代わりに鼻が発達しているような描写で描かれている⁽¹⁴⁾。

昔話には視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚という五感のうち、視覚以外の感覚表現が多く見出せるのだが、それは専制君主や啓蒙主義の時代から荒唐無稽の民間伝承という扱いを受けていた昔話は誰も気に留めることが無かったことから人間的な感情の制約が何もない本来の残虐性を含んだ姿が表現されており、そこには視覚以外の感覚が息づいているのだとされる⁽¹⁵⁾。

人間は周囲の環境を認識する時、さまざまな感覚器官を通してそれを感知しているわけだが、感触や匂い、音といった環境情報は原始的な感覚であり、対して視覚の本質は知的なものだとされる。視覚は他の知覚形態に影響を及ぼす独裁的な感覚であり、時として人が自分の内側に集中する時などは目を閉じる場合がある。例えば音楽を聴く時、花の香りを嗅ぐ時、ワインの味を味わう時、そして、暗算する時などに自然と目を閉じて視覚からの情報を遮断することがある。つまりは、視覚は人間に大きな力を持っており他の感覚を駆逐してしまうが、周囲の環境を得るには他の感覚が必要になってくる。そうした視覚以外の感覚器官で知覚する景観を「心のなかの景観」という⁽¹⁶⁾。

そうして人間は「目の動物」といわれる程に、視覚を重視しており、逆に嗅覚が発達しているのは動物性を示しており、目の悪い魔女はその分、鋭い勘をそなえている⁽¹⁷⁾。ユング派の深層心理学において鬼や魔女といった存在は読者たちの無意識の側面を表したものだという⁽¹⁸⁾。昔話とは主人公の心の旅をストーリーの中で現し、主人公の心の成長を描いているというが、これら空想の怪物、特に魔女や鬼などは人間の心が成長していく過程で現れる「グレートマザー（太母）」の悪母の部分の表現である。

グレートマザーとは母性の元型であり、主な役割は子供を「包含する」というものだが、それが善母であるプラスに働けばその母性は子供を宥

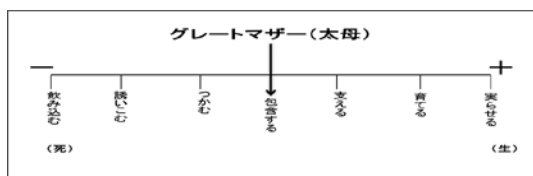


図1 グレートマザーの性質

せ「生」に向くが、マイナスに働く悪母となると、「包含から」「つかみ」「誘い込み」、最後には子供を飲み込み「死」に至らしめる⁽¹⁹⁾。

心の中というのは視覚の力が及ばない無意識の世界である。目の動物である人間がいるのは当然だが、社会である。昔話では主人公が悪母の姿であるグレートマザーに会うのは大抵人気がない森や山中である。このようなところは人の手が入らない非社会の場所であり、無意識の世界でもある。このような無意識の世界に暮らすものは視覚ではなく、それ以外の器官を駆使して主人公に働きかけてくる。無意識の領域では、非社会の感覚器官とも言える聴覚・嗅覚・味覚・触覚による感知は時として「第六感（直感）」となって働きかける。

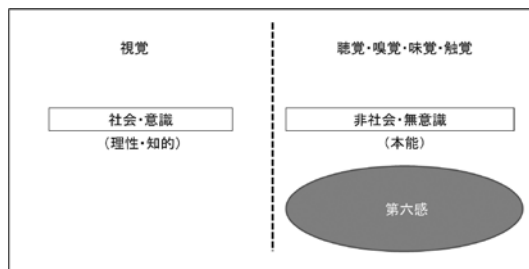


図2 心のなかの景観の図解

意識の世界の住人である主人公が無意識の世界に訪れ場合、戻するには視覚以外の器官に頼り目に見えない景観に働きかけなければならない。このような昔話における視覚以外の感覚器官を駆使して感知する景観もまた「心のなかの景観」といわれる⁽²⁰⁾。そして、物語では無意識の世界の住人はそれら無意識の器官とも呼べるもの（聴覚・嗅覚・味覚・触覚）を使って語りかけてきており、主人公もまた視覚以外の器官を駆使して困難を解決し、時には悪母を倒すことによって意識の世界に戻ってきた際に人間として成長できる。

では、昔話の山姥などの怪物は人が成長するのに必要な母性の表現だというのなら、「蜂」の昔話としての立ち位置は人にとってどのような存在なのだろうか。

第3章 人を助ける「蜂」 ——日本昔話「蜂の援助」から

(1) 「蜂の援助」とは

話は戻るが、日本昔話における「蜂」の役割の認識について手始めに、物語の中で「蜂」が重要な役割を担っている場合の割合が多い「蜂の援助」と呼ばれる昔話からみていく。

昔、あったずもな。

ある所に、長者殿があったずもな。その長者殿に娘ア三人あって、一人の娘サ婿ほすくて、立看板出したずもな。ある男アそご歩いて、婿ほすいてごどア書がってだから、うんだらば入ってみべえがど思て入ったずもな。そして、
「いにごどサ来た。」

「明日の朝、この裏にお堂アあるから、お堂掃除に行つてこ」って、握りコ四つだせられだずもな。その握りコ四つ持って、その男アお堂掃除に行つたずもな。したつたずが、その男ア帰つて来ながつたずもな。まだ次に、婿ほすいずう立て看板見で来た男アあったつたずもな。

「いにごどサ来た来た」

って、まだ泊められで、早く起きで、

「そのお堂の掃除に行つてこ」

って、まだ握りコ四つ持だせられだずもな。そして行つて、その男も帰つて来ながつたずもな。

そごサある一人も若え者ア行つたずもな。ぞの看板見で、

「おがすい、婿ほすいなんて。まずなんたなごどだが、おれも入つて見るべ」

ど思て、入つたずもな。そして、旦那殿ア、

「じゃじゃ、若者様、いにごどサ来た」

って、そして、

「おれの婿になるにゃ、近々、こういうごどさねばねえ」

つたので、朝間早く起きで、握りコ四つ持って、裏のお堂掃除に行つたずもな。その若者コアそのお堂掃除してで、なんともしわれねえ、からだアザワザワザーツとなつて、そのお堂サ、カーツと霧みでえなのアかがつてきたつたずもな。その若者様ア握りコ四つもらつて行つたが、その握りコ半分掃除してで、まだ、そ

んたになつたつたずもな。

そして、その握りコ半分投げだずもな。そして、握りコ半分ずづ投げ投げ、とうとう四つ投げけるうづに、そのお堂掃除してすまつたずもな。そして家サ来たずもな。

そして、旦那殿ア、

「いにごどした。いにごどした。それでばりゃ、家の婿にゃならねえがら。打づ藁一本、千両で売つてこう」

って、言つたずもな。その若者コアまずきてえなごどアあるもんだど思て、打づ藁一本持つて出はつたずもな。そして、向うのほうから、

「朴の葉一、朴の葉」

って、朴の葉売りア来たつたずもな。その朴の葉売りア「なんにでも圧やえでおがねえがら、風オ吹ぐど、バシャーと朴の葉ア飛んだずもな。うんだがらその藁コ一本けだずもな、その人サ。その朴の葉結いつけだがら、風ア吹いても飛ばねえで、そして、その礼だつて朴の葉二枚もらつたずもな。そして、その朴の葉二枚もらつたずもな。そして、その朴の葉二枚もらつて、まだ行くが行くが行つたずもな。そして、向うの方から味噌売りア来たつたずもな。

「三年味噌一、三年味噌」

って、三年味噌売りア来たつたずもな。そして見で、その三年味噌売りの桶に、蓋コアながつたずもな。うんだがら、味噌屋サその朴の葉けだずもな。そして、その若者様サ、
「おればかりだもらつていられねえがら」って、三年味噌の握りコ二つもらつたずもな。そしてそれ持つて、ある宿屋サ泊つたずもな。

そして、その宿屋の旦那殿ア、なにもかにも長え病え取つがれで寝でだつたずもな。面つき悪くして、なじょうにしても治らねえ、なじょうにしても治らねえってだつたずもな。この位大きな宿屋だがら、なんたなごどもしたども治ながつたずもな。そしていにごどサ、泊めで行つて行つて泊つて、そごの旦那殿ア三年味噌食えば治る病気だつたずもな。うんだがら、その若者コア、持つてだ三年味噌けだずもな。そして、その旦那殿ア次の日アバリツと良くなつたずもな。おかげであれ位せづながつたのが良くなつたつて、お前サ何か礼してえがらつて、千両

箱一つもらったずもな。そして、その若者コァ千両箱たねえで、その家サ帰って来たずもな。

そうしてえば、そごの旦那殿ァ、

「いやァ、よぐ千両に売ってきた。いいごどした。いいごどした。ただす、おれの婿にァこればりでえなられねえ」

って、言ったずもな。

「裏に竹やぶあつから、竹ァ何本あるが数えでこう」
 ったずもな。行ってみでえば、なにもかもいっぺえだったずもな。竹ァ。さで、まず、なんじょうにして勘定したらいがべど思っ、立って考えでいでえば、蜂ァ飛んできたったずもな、ブンブン、ブンブンど。その蜂の羽の音が、三万三千三百三十三本ど聞えだずもな。なんとに聞いでも、三万三千三百三十三本ど聞えだずもな。それがら家サ来たずもな。

「あの竹、三万三千三百三十三本ある」

って、言ったずもな。そしてえば旦那殿ァ四方がら人足集めで、その竹、数え方したずもな。そしてえば、いがにも三万三千三百三十三本あったったずもな。

今度ごそいがべど思ってえば、今度ァ娘三人出して、

「この中で、どれがお前の嬢になるのだが、それ当でたら婿にする」

って、言われだずもな。さあ、その人もどれがそうだが、すっかり似だくせえ娘三人ならべられながら、訳わがんながったずもな。便所サ行くふりして立ったずもな。そうしてえば、まだ、蜂ァ、ブンブン、ブンブンど飛んで来たったずもな。そして、その蜂の音ッコが、

「中そだ。中そだ」

ど聞えだずもな。そんだがら、その若者コァ戻って来て、

「まん中の娘が、おれの嬢になる人だ」

って、言ったずもな。そしてえば、旦那殿ァ

「よぐ当でで、よぐ辛抱してけだ」

って、その人が蜂のおがげで長者殿の婿になったんだどサ。

どんどはれえ。

長者が娘の婿を探していると看板を立てたところ、次々と男がやって来るがお堂の掃除を頼むと帰って来ることはなく、三度目にやって来た若者だけが現れた霧に長者から持たされた握り飯を半分ずつ投げることで掃除を終えて帰って来た。長者は次に若者へ一本の藁を千両で売ってくるようにと難題を与えると、若者は貰った藁を朴の葉から三年味噌へ交換していき最後に宿屋から千両を持って帰って来た。今度は、若者は竹藪の竹を全て数えるという課題を課せられる。若者が竹藪を前に途方に暮れていると蜂が飛んできて、羽音が「三万三千三百三十三本」だと聞こえたので長者に報告する。長者たちが数えると本当に三万三千三百三十三本あったことから若者が3つ目の難題も解決したことになる。最後に長者は若者に三人いる娘のうち、誰が結婚相手あるかを当てる難題を与える。若者が困っているとまた蜂が来て「中だ」と羽音が聞こえたので若者が長者に真ん中の娘だと答えると全ての難題を解決した若者は長者の婿となることができた。

この昔話は、難題を解決することによって長者の聲になる難題聲譚のひとつであり、難題を解決する援助を行う相手である蜂が答えを教えるというもので、1章で提示した昔話に登場する「蜂」の役割のうち、「手助け」と「恩返しによる手助け」の部分に当てはまる昔話であり、全国各地に類話が存在している。このような主人公が難題を解決することによって婿になる難題聲譚は、『古事記』において大国主命の根国訪問説話といった古代文獻に登場する古いモチーフの昔話だとされる⁽²²⁾。

上記の昔話は岩手県で採取されたものだが、類話によっては冒頭で若者が蜂をはじめとした動物を助けたことによってその恩返しに難題を援助してもらう他、地方によっては蜂が援助する難題は屋根から降って来た岩を受け止めると言われ、羽音が紙のだと教えてくれる場合などがあるが、多くは竹藪の竹と数えるのと結婚相手の娘が誰なのかを蜂は羽音を使って教えてくれる描写が共通している。

蜂が主人公の難題を助けるのは、関敬吾の日本昔話大成で「蜂の援助」に分類されたもの以外にも、「笛吹聲」や「娘の助言」などの他の難題聲

一岩手県遠野市綾織町一⁽²¹⁾

譚の類話でも行われている。また、娘を当てる蜂の様子は、天女女房の類話にある蜂が飛んできて天女を当てる描写と酷似している。

(2) 「蜂の援助」に登場する「蜂」の役割の分析

「蜂の援助」において重要になるのが蜂の出す「羽音」である。それまで蜂はおろか動物の声すら聞けないはずの若者は竹藪の竹を数えろという難題に対して、本来はブンブンとしか聞こえないはずの蜂の羽音が答えだと認識したことで難題を解決すわけだが、蜂の羽音とはどのようなものなのだろうか。

蜂の羽音について注視しているのは日本だけではない。蜂、特にミツバチの羽音については、楽しい工房に例えられ、中世のキリスト教では蜂の羽音が本物の「歌」とされ、また、神の知性がわずかにそなえているものだとされる他、蜂自体も現実的と精神的な二面性の象徴であるとされている⁽²³⁾。そのことから、蜂の羽音は世界中で注視されているものだと考えられる。

蜂が出す音はいわば、環境が出す音「音風景(サウンドスケープ)」⁽²⁴⁾ だといえることができる。前章で語ったように人間は目の動物と呼ばれる程に視覚からの情報に重きを置いている傾向がある。視覚は見ただけで他者と情報共有ができる客観的な感覚あるのに対して、それ以外の感覚器官は主観的な部分であることから判断が難しく社会では重要なものだと扱われることが少ない。しかし昔話のなかでは、「大工と鬼六」の森での声や、「聞き耳頭巾」の鳥の話し合いなど度々自然的な存在の声や音によって主人公が窮地を脱する手立てが描かれる。これはいうなれば、主人公のそれらの音を聞いたという聴覚に働きかけているということになり、主人公がこのような声を聴けるのは、人の手が入らない無意識の領域に意図せず迷い込んでいき、視覚の効かない無意識の世界で視覚以外の器官を使って環境を知り得たことになる。物語での音とは時に無意識の住人からの語りかけであり、それを聴覚で知覚できた主人公は直感とも呼べるそれらによって意識の世界へ戻り窮地を脱するのである。

竹藪を前にした主人公はそのあまりの数に困惑してしまうわけだが、ユング派の心理学者である

河合隼雄は、「自らの意志による決定権を放棄することも、昔話によく生じる主題である」と主張する他、「自我に決定を越えるものを受け入れる際、主人公たちは鳥や羽の導きに委ねる」⁽²⁵⁾ という。鳥は「飛ぶ」や「鳴く」、「渡る」といった特徴から異なる世界から「やって来るもの」「何かをもたらすもの」⁽²⁶⁾ だと考えられているところがあり、河合はグリム童話の「三枚の鳥の羽」で説明しているが、物語の中で主人公たちは判断を迫られた場合に鳥の羽を頼りにしている⁽²⁷⁾。

「蜂の援助」の場合は主人公を導くのは「蜂」であるが、それまで自力で行動していた主人公は竹藪の竹を一人で全て数えろというよう難題を前に困惑し、蜂の羽音から答えを得ている。この場合、主人公は自らの意志決定から答えを出すのではなく、蜂から得た答えを口にしているということになる。

困惑とは、つまり意志(自我)の放棄である。竹藪もまた山とどうように無意識の世界への入り口と考えた場合、自我を放棄した主人公の意識は社会という意識の世界から非社会である無意識の世界へ移動していったと考えられる。そして、無意識の世界へ移動した主人公は視覚以外の器官を使わなければならないのだが、そこに羽音という聴覚への働きが起きる。何度もいうように、無意識の世界では視覚以外の五感が重要になってくるわけだが、それら動物性の主観でしか判別できない器官は本能的な「直感(第六感)」とも結びついており、長者の家がいうなれば人の暮らす意識の世界だと想定すると、難題に困惑していた主人公は竹藪という無意識の世界へ入り聴覚という知覚の感知によって羽音を答えだと直感したことにより、意識の世界である長者の家に戻り結婚という人としてのある種の成長を成功させるのに至ったのではないかと考えられる。

そして、主人公を導いた羽音の持ち主は蜂であり、「蜂」はいわば自然の存在(無意識の住人)でもある。「蜂の援助」をはじめとした難題譚では描かれていた「蜂」は、難題という窮地に困惑して無意識の世界へ移動した主人公をその羽音によって幸運へ導く良性的存在であるとして描かれている。

第4章 宝へ導く「蜂」 —日本昔話「夢買い長者」から—

(1) 「夢買い長者」とは

前章では、「蜂」が「助ける」、「恩返し」といった良質な性質を表している「蜂の援助」についてみたが、この章ではもう一つ「蜂」が人に良質な側面であることが描かれている「夢買い長者」に登場する「蜂」の役割について分析する。

とんと昔があった。

村の男が二人で、山へ春木のしごとに行った。ほうして、山でしんけんでかせいで、ひる昼休みをした。ほうしたら、一人はねってしもた。もう一人はねらんでいた。ねった男の、はなの穴から、ハチが一びき、はい出てきて、プーンと、佐渡の方へたっていた。ほうして、ちっとめえると、そのハチが、ねっている男のはなの穴にいた。ほうすると、男が目をさまして、

「おら、きめような夢を、見たや。」

「どんげな夢見たや。」

「それが、佐渡のなんとかというお寺の、庭に咲くツバキの花の下に、かながめが、うまっている夢を見たや。」

「そうか、ほんなら、その夢を、おらに、うってくれ。」

というんだが、いくらかのかねで、うってやった。その夢を買った男は、それから佐渡の、そのお寺へ行って、寺若いしゅにすみこんで、春になって白いツバキの花の咲くのをまっていた。ほうしてうちに、三年めに、白いツバキの花が咲いて、その下を、こっそりほって見たれば、かながめがあった。かながめのなかには、かねがいっぱいあった。男はそれもってきて、ごうき、しんしょうよくしたと。

いちごさけもうした。

—新潟県小千谷市孫四郎—⁽²⁸⁾

「夢の蜂」という名でも知られている昔話で、山仕事の休憩中に昼寝をした男の鼻から蜂などの虫が飛び出し、鼻に戻ると男が目覚めると男は傍にいた友人に夢で財宝の隠し場所を見たと教える。話を聞いた男はその夢を買い、夢の場所を掘

ると財宝を見付け長者となるという、蜂が宝へ導いてくれる昔話である。

この昔話の類話による違いには以下のようなものがある。

◆ とんと昔があったとい。

村の男が二人で、春さき、山へしばきりにいったとい。そうして、ひるになって二人は休んでいたとい。そうすると、一人の男は、すぐにねむってしもうたし、もう一人の男は、なんとなしに、ねむらんでいたとい。そうすると、ねむっていた男の、はなの穴から、アリゴ（アリ）が一びき、はい出してきたとい。ねむらん男が、

「はて、はなの穴から、アリゴが出てきたが。」

って、おもて見ていたとい。そのアリゴが、そばにあるスギナの、とっぽうまであがって、おっかなそうなかっこうして、モジモジしていたけが、こんだ、もどってきて、はなのべつほうの穴にもぐりこんだとい。そうしたらば、男は、目をさまして、

「おら、いま、おっかないゆめを見た。」

「どんなゆめ見た。」

「でっこい木の、とっぽうにあがって、おっかのうて、そこから、おちそうになったゆめ見た。」っていうたとい。人のたましいが、ねむっているときに、アリゴになって、あそびに出たという。

これでないこと。

—新潟県西頸城郡青海町上路—⁽²⁹⁾

◆ とんと昔あったとい。

雪がけえて、春さきに、村の男が二人して、山へしばきりにいったとい。ほうして、いっぶく休みしているうちに、ひとりの男が、ねぶってしもた。ほうしたら、その男のはなの穴から、クモが一びき、ムザムザと出てきて、むこうの方に糸はって、木につなげたとい。ほうして、しばらくして、その糸をつたって、おっかなげなかつこうで、もどってきて、また、男のはなの穴に、ムザムザとはいっていったとい。ねぶらん男は、それを見ていた。ほうすると、男は目をさまして、

「あ、おれは、おっかない夢を見たや。下を見ると、目がクラクラするような一本橋をわたっていたや。」

というたとい。ねむらん男は、
「そうか、そうか。」
というていたども、人のたましいは、ねっている
ときには、はなから出たりはいったりするんだとい。
これでないこと。

—新潟県西頸城郡青海町上路—⁽³⁰⁾

他には、男の鼻から出てきたアブを殺すと男も死んでしまうというものなどの類話が伝えられており、全国的に分布してはいるが、全てが財宝を手に入れられるわけではなく、出てくる虫も蜂だけではなく、アブ、蠅、クモ、アリ、チョウといったものが挙げられる⁽³¹⁾。

人の魂が虫となって飛びまわるのは、人間の靈魂が虫をはじめとした動物の肉体を借りて睡眠中に肉体から出ていく信仰は世界中に存在し、さらに、夢を買うという言葉信仰を彷彿させる物語の構成は「夢の宝石を買う」という分類に属し、日本だけではなく中国やシベリア、ヨーロッパ、南米など多くの地域に存在する⁽³²⁾。

では、この昔話の蜂をはじめとした虫とは人間の魂である他に、物語の中でどのような重要性を担っているのだろうか。

(2) 「夢買い長者」に登場する「蜂」の役割の分析

「夢買い長者」を分析するにあたり、物語の中で主人公にあたる男たちは山仕事をするために自分たちの村から山へ入っていく。村とは人間が開拓した世界、つまり意識の世界だとみることができる。そして、山とは人の手が入っていない未開拓地という、社会である意識の世界とは反対に位置する非社会という無意識の世界の一つとされる。山仕事をしに行くということは、人が暮らす意識の世界である村と人の手が入らない無意識の世界の山との境目にあたる麓となり、それは意識の世界と無意識の世界の境目である。

二人の男の内、一人は眠ることによって魂を虫に姿に変え、夢という無意識の領域に入ったのだと考えられる。そして、虫となった男の魂は無意識の世界に入り、財宝を見つけ出し目覚めることで意識の世界に帰ってくるわけだが、これを簡易に図化すると図3の状態だと考えられる。

男が見た夢という世界は無意識の世界であり、

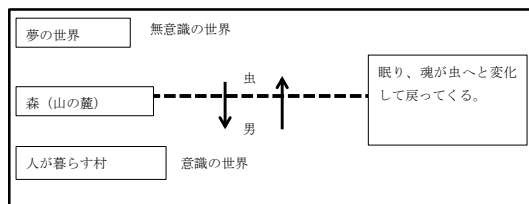


図3 「夢買い長者」の図解

意識の世界である男たちが暮らす人の村から芝を刈るために二つの世界の境目にあたる山にある仕事場へやって来る。境目にあたる山の麓だと考えられる仕事場で、ひとりの男が眠るとその魂は虫となって夢という無意識の世界へ向かい、やがて意識の世界にあった元の男の肉体へ帰ってくるとい、境目で魂がふたつの世界を行き来したということがわかる。

話は少し変わるが、この物語で注目したいのが「夢買い長者」では、蜂となって見付けた財宝を手に入れるのは、夢をみた男ではなく傍で目覚めていた男から夢の内容を聞いた別の男だった点である。

何度もいうが、「夢買い長者」では眠った男の魂が虫となって無意識の世界で財宝がある場所を見付ける。財宝の場所を見付けるとは、目で見ていと言ひ換えられ、つまりは、視覚による感知であるとみることができる。また、眠っていた男の語りからわかるように、虫になった自分の魂が虫になって何処かに行っていたという自覚が存在せず、虫目線から世界を見ていた。視覚とは理性に直結し、五感の中でも社会という意識の世界の知覚とされる。夢を見た男は無意識の世界にいながら虫からの目という意識の感覚器官である視覚で知覚してしまったことによって、目覚めた瞬間に虫であったという自覚は消え失せ、不思議な夢を見たという視覚からの情報のみが残ったことから夢の内容を現実のものではないと考えたのではないかとみることができる。

それに対して、傍にいた男は夢を見てはいないが森という無意識と意識の境目で目覚めた男の話の聞いただけで夢の場所へ向かい財宝を手に入れている。聞くというのはやはり聴覚による知覚だとみることができるのではないだろうか。仕事の場である森という人の手が入らないという意味にも

なる無意識の世界にいた男は、夢を聞くという聴覚で感知したことにより夢として聞いた場所の話が現実の場所だと直感したのではないのかと考えられる。

けれど、何故虫が財宝の場所へ導くものとなるのかは明確に判然した研究は現状のところ見付かっていないが、「夢買い長者」がまた「夢の蜂」と題されることがあるように、財宝を見付ける展開の場合では男の魂が変化するのは大抵が蜂へ変化している。そう考えた場合、蜂と他の虫との違いとして、蜂は「蜂蜜」という明確に人へ甘味ともなる食材を提供する存在である。明確な食材を与える蜂がこの昔話で宝を与える存在として適任とされたとも考えられないだろうか。

第5章 人に危害を加える「蜂」 一隣の爺系統の昔話から—

(1) 人に危害を加える「蜂」たち

—婆さんは雀が明日は何の土産を持ってくると案じていると、翌日雀が窓際に来て囀っているから、婆さんあわてて雨戸を開けると、瓢の種を持ってきて散らかしているの、欲張り婆さんはいへん喜んで残らず畑に蒔いた。ところがりっぱに芽が出て花が咲いて実がなって、たくさんの瓢ができた。そこでその瓢をみな軒先につるして、はや米できよ、はや米できよとて毎日それを眺めていたが、いっこう白米のできる模様もない。欲張り婆さんはいへん怒って瓢を全く引っ張りおろして、一々それを打ちこわした。ところがその中から蛇や百足や蜂、とかげなどがうようよ出てきて、婆をおっとりかこうで刺すや突くやらして攻めたので、婆は何とも防ぐでだてなく、ついに悲鳴をあげて狂い死にをしたということです⁽³³⁾。

福岡県浮羽郡で採取されたとされる昔話「腰折雀」の末尾周辺を引用させてもらった。腰の骨を折った雀を拾った婆さんが介抱した恩返しに雀が瓢箪の種をくれたので、育てると実った瓢箪の中から白米が出てきた。その話を聞いた欲張り婆さんは捕まえた雀の骨を折り碌に介抱もせずに恩返しを期待したが出来た瓢箪から現れた蛇や蜂に襲われ絶命してしまう。一見すると因果応報とも受

け取れる内容ではあるが、ここでも欲張り婆さんが育てた瓢箪からは蛇やトカゲと一緒に蜂が登場している。

前のふたつの章では比較的人間に友好的とも受け取ることのできる「蜂」の良性をみてきたわけだが、関敬吾の『日本昔話大成 本格昔話』に分類された昔話の中で「蜂」が登場したのは98件だが、その半数に至る48件は上記の「腰折雀」のように主要人物である隣の爺的な存在へ危害を与えるものとして登場している。

そもそも「隣の爺」とは「花咲爺」や「舌切り雀」といった昔話に登場する、一般的に善人として登場することの多い爺さんの真似をして失敗を繰り返す物語の悪役的な立ち位置として登場している。そういった物語の悪役たちは、善人たちが富や財宝を得た方法を模倣して自分たちも財を手に入れようとするが、出てくるのは汚いものや妖怪といった化け物などの恐ろしいもの、蛇や蜂といった毒を持った生き物のものをはじめとして失敗ばかりで、時として命を落としてしまう。

このような役割をする「蜂」が登場する場面としては、例えば「花咲爺」の物語は、良い爺が可愛がっていた犬が次々と呪力的を発揮して爺に富を与えるというもので、それを聞いた隣の爺が同じことを繰り返して失敗していくもので、犬が掘れと言った場所を掘ると良い爺は小判には小判、隣の爺が無理やり良い爺から借りてきた犬が示した場所を同様に掘るが、出てくるのは糞やゴミ、そして蜂といったものであった。似た話に「雁取爺」という昔話があり、「花咲爺」とどうように犬が掘れという場所を掘ると良い爺には財が、犬を借りてきて探させた悪い爺は何も手に入らないということが起きる場合の他、類話によっては犬が獲物の代わりに悪い爺には蜂を引き連れてくる場合がある。そして、民俗学者である柳田國男は「雁取爺」は「花咲爺」の元になった昔話だと指摘しており⁽³⁴⁾、呪力をもった不思議な犬やその犬からできた特別な灰など、二つの昔話はいくつか類似した点を持っている。

もうひとつ例である「舌切り雀」では悪役になるのは大抵の場合爺と一緒に暮らしている婆であるが、これもまた、関敬吾は隣の爺系統の昔話に分類している。飼っていた雀が婆に舌を切れこ

とによりどこかに行ってしまったことから、爺は雀を探すためにさまざまな試練を達成していき雀の宮で飼っていた雀と再会するわけだが、帰り際に土産として大小の葛籠のどちらかを選べといわれ、爺は小さい方の葛籠を持って帰ると中には宝をはじめとした財宝が入っていた。それを見た婆がどうよの試練を矢継ぎ早に達成していき、雀の宮を訪れると土産に爺と同じように大きさの違う葛籠が用意される。婆は欲をかって大きい方の葛籠を持って帰るが、途中で疲れたので葛籠を開けてしまう。葛籠の中に入っていたのは財宝ではなく化け物や蛇、蜂などといった毒虫の他にも類話によってさまざまな恐ろしいものが入っており、婆は逃走や時にはそのまま死んでしまうという話である。

自然界で毒を持つ生き物は確かに恐ろしいものではあるが、それだけなのだろうか。

これらの昔話では、いずれも本来人の言葉を介さない犬や雀といった動物たち良性の登場人物には富を与え、逆に悪性の登場人物には相応の罰を与えているようにもみえるのではないだろうか。

河合隼雄は、日本昔話において積極的な怠けは時として創造となり、成功につながるが、真似をするだけの怠けには厳しい罰が待っているという⁽³⁵⁾。「蜂の援助」などの主人公である若者は難題を前に困惑し思考を放棄するわけだが、思考の放棄とは一種の怠けともいえる。

犬や雀とは昔話に登場する超常的な自然の存在、つまりは無意識の世界の住人であることは確かであろう。前半に登場する良い爺とされることの多い良性の登場人物は、これら無意識の世界の住人の導きによって意識の世界から無意識の世界へ傾いていったと考えられる。特に「舌切り雀」に登場する雀の宮などまさに人の手が介入できない異世界という無意識の世界だといえるだろう。その無意識の世界において良性の登場人物は聴覚などの視覚以外の五感を駆使したことにより、本来人の言葉が使えないはずの犬や雀といった動物が人間のように言葉を話しているのだと理解し、直感ともいえる感覚によって「花咲爺」で犬から変化していった灰を捲いて花を咲かすことになる動機や、「舌切り雀」の葛籠の選択を財宝が手に入る方向へ成功を取めたのだと考えられるのではないだろうか。そうして、後半に登場する財

を得ることに失敗する、一般的には悪者とされる隣の爺こと悪性の登場人物は、前もって良性の登場人物が財宝を手に入れる方法を知っていたことから無意識の世界の住人の言葉に耳を貸さず、目先の欲に駆られ、積極的な怠けとはいえない他者の真似をするという怠けをしたことにより創造性によって得られる富を得ることが叶わず、失敗に終わる他、時には無意識の影に飲まれえて死に至ったのではないかと考えられる。

そして「蜂」もまた、自然という無意識の世界からやってくる住人である。積極性の欠けた模倣という怠けを行った悪性の登場人物はその厳しい罰として、「蜂」をはじめとした毒虫や化け物という無意識の世界の使者が襲ってきたのではないかと推測される。

第6章 結論

ここまで、難題に悩む主人公に羽音を使って助ける「蜂の援助」や眠っていた男の魂が虫となって財宝がある場所へ向かう「夢買い長者」、物語の悪役的な立場に置かれる隣の爺系統に当てはまる悪性の登場人物への厳しい仕打ちとして登場して危害を加えるといった役割を担う「蜂」を見てきたが、何故それが蜂である必要があるのかは現状判断できうる材料がない。しかし、「蜂」のこれらの行動に、昔話における「ストレンジャー」の役割を見出すことはできないだろうか。

ストレンジャーとは、昔話のトリックスターと高い類縁性を持っているとされ、トリックスターは「いたずら者、ぺてん師、詐欺師」と訳されるように神話・伝説の世界では時として道化となって活躍している⁽³⁶⁾。そういったトリックスターは、いたずらやトリックを使い日常のある世界を破壊することによって存在の全体性を回復するという逆説的な働きをしており、対して、ストレンジャーもまたその登場によって日常に非日常性へもたらす存在であるとされる⁽³⁷⁾。

トリックスターは非道徳的で善悪の区別はなく、いたずらやトリックによって物語の中では姿を変えるなどし、人々に騒ぎを起し笑いを与える存在であり、場合によっては英雄にもなりえる存在である⁽³⁸⁾。そしてそれは、無意識の中での

自我の芽生えであり、自我の確立のために母性と対立するものだとも考えられている⁽³⁹⁾。

では、日本昔話の「蜂」はどのようなのだろうか。これまで紹介してきた日本昔話の中にはグレートマザーのような母性の象徴になりうる化け物も登場せず、「夢買い長者」のように人の魂が虫になることはあってもそれら虫がさらに別の存在（ましてや女性）になることもなければ、蜂がいたずらをするようなこともない。このことから「蜂」のトリックスターとしての性質は薄いもののように感じられる。しかし、「蜂」という存在は助けられた恩返しなどの差はあるが物語の中で突然現れ何かしらの働きを行い、時には人を助け、財宝がある場所へ向かい、真似という怠けを行うものを襲っている。そうした蜂の行動はそれまでの日常を非日常へ変化させる侵入者だと見ればその性質はトリックスターではなく、トリックスターと類縁性のある「ストレンジャー」であり、物語の世界に何かしらの変化を与える存在なのではないのだろうか。

結 び

既に結論を書いたわけだが、全体の総括としてここに結びの章を書かしてもらおう。

現代に至るまでの日本人の「虫」に対する関係性と認識を考察するにあたり、古くから人々の間で語り継がれている日本昔話からそこに登場する動物たちを集計していき、一般的に「虫」と呼ばれるものの中で最も採取件数のあった「蜂」を対象に日本昔話におけるその役割をみてきた。

日本昔話における「蜂」の役割は多岐にわたり、特に人を助ける役割が他の虫に比べて多いことが判明した。その中ら蜂が重要な役割を担っている「蜂の援助」と「夢買い長者」を心理学的な観点から分析を試みたわけだが、現状では蜂である必要性までは見出せることは叶わなかった。しかしながら、少なくとも日本昔話の世界において「蜂」とは特徴的な羽音を鳴らして空を飛び、時には財宝の場所を示し、悪性のものを退治するために現れる様子は日常を非日常に変える「ストレンジャー」であり、人の成長において重要な役割を担っていたのではないのだろうか。

注

- (1) 関敬吾 『日本昔話大成第7巻 本格昔話六』角川書店 1978 p.122-215.
- (2) 中村禎里 『狸とその世界』朝日新聞社 1990 p.3.
- (3) 前注 (2) p.38.
- (4) 新村出編 『広辞苑第7版』岩波書店 2018 p.2854.
- (5) 諸橋徹次・渡辺末吾・鎌田正・米山寅太郎 『新漢和辞典新装大型版』大修館書店 2002 p.766.
- (6) 関敬吾 『日本昔話大成第2巻 本格昔話一』角川書店 1978 p.8-64.
- (7) 前注 (6) p.158-175.
- (8) 岩下均 『虫曼荼羅—古典に見る日本人の心象—』春風社 2004 p.54-55.
- (9) 前注 (8) p.57-58.
- (10) 佐々木高弘 『シリーズ妖怪文化の民俗地理1 民話の地理学』古今書院 2014 p.73-74.
- (11) 前注 (10) p.20.
- (12) 河合隼雄 『昔話の深層』福音書店 1977 p.16-18.
- (13) 前注 (12) p.21-24.
- (14) 前注 (10) p.3.
- (15) 前注 (10) p.4-5.
- (16) ダグラス・ボコック「はしがき」(米田巖・湯山健一訳編『心のなかの景観』古今書院 1992 p.iii).
- (17) 前注 (12) p.62.
- (18) 前注 (14) に同じ.
- (19) 前注 (12) p.31-35.
- (20) 前注 (10) p.22-27.
- (21) 野村純一監修 『いまに語りつくす日本民話集 [第1集] 6』作品社 2001 p.150-157.
- (22) 稲垣浩二 他編『日本昔話事典』弘文堂 1994 p.744.
- (23) 金光仁三郎訳『世界シンボル大辞典』大修館書店 1996 p.947.
- (24) 前注 (10) p.9.
- (25) 前注 (12) p.223.
- (26) 篠原徹「動植物をめぐる俗信とことわざと俳諧(兆・応・禁・呪の民俗誌)」『国立歴

史民俗博物館研究報告書 174』国立歴史民俗博物館 2012 p,235～245.

- (27) 前注 (12) p,223-224
 (28) 水沢健一『雪国の夜語り―越後の昔ばなし―』野島出版 1968 p,158-159.
 (29) 前注 (28) p,129-130.
 (30) 前注 (28) p,127-128.
 (31) 前注 (22) p,991.
 (32) 前注 (31) に同じ.
 (33) 関敬吾『日本昔話大成第 4 卷 本格昔話三』角川書店 1978 p,250.
 (34) 前注 (22) p,237.
 (35) 前注 (12) p,88.
 (36) 河合隼雄『影の現象学』思索社 1976 p,171.
 (37) 前注 (36) p,192.
 (38) 前注 (12) p,145.
 (39) 前注 (36) p,175.

資料

- ・関敬吾『日本昔話大成第 2 卷 本格昔話一』角川書店 1978.
- ・関敬吾『日本昔話大成第 3 卷 本格昔話二』角川書店 1978.
- ・関敬吾『日本昔話大成第 4 卷 本格昔話三』角川書店 1978.
- ・関敬吾『日本昔話大成第 5 卷 本格昔話四』角川書店 1978.
- ・関敬吾『日本昔話大成第 6 卷 本格昔話五』角川書店 1978.
- ・関敬吾『日本昔話大成第 7 卷 本格昔話六』角川書店 1978.
- ・野村純一・監修『いまに語りつぐ日本民話集 [第 1 集] 6』作品社 2001.
- ・水沢健一『雪国の夜語り―越後の昔ばなし―』野島出版 1968.

参考文献

- ・中村禎里『狸と其の世界』朝日新聞社 1990.
- ・新村出・編『広辞苑第 7 版』岩波書店 2018.
- ・諸橋徹次 渡辺末吾 鎌田正 米山寅太郎『新漢和辞典新装大型版』大修館書店 2002.
- ・岩下均『虫曼荼羅―古典に見る日本人の心象―』春風社 2004.
- ・佐々木高弘『シリーズ妖怪文化の民俗地理 1 民話の地理学』古今書院 2014.
- ・河合隼雄『昔話の深層』福音書店 1977.
- ・ダグラス・ポコック (1992) 「はしがき」(米田巖・潟山健一訳編『心のなかの景観』古今書院)
- ・稲垣浩二 他・編『日本昔話事典』弘文堂 1994.
- ・金光仁三郎・訳『世界シンボル大辞典』大修館書店 1996.
- ・篠原徹「動植物をめぐる俗信とことわざと俳諧 (兆・応・禁・呪の民俗誌)」『国立歴史民俗博物館研究報告書 174』国立歴史民俗博物館 2012. 235～245 頁
- ・河合隼雄『影の現象学』思索社 1976.